



Title	アメリカローマーインド : Unaccustomed Earth におけるコスモポリタンな移動
Author(s)	松本, ユキ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2012, 2011, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アメリカローマインド

——*Unaccustomed Earth* におけるコスモポリタンな移動——

松本 ユキ

1. はじめに

近年、アジア系アメリカ文学においては、「アジア」と「アメリカ」という二項対立的枠組みを超えて、ディアスポラやコスモポリタンな視点からそれらの枠組みを捉え直そうとする試みが見られる。¹そのような試みの一つとして、本稿では、ジュンパ・ラヒリ (Jhumpa Lahiri) の三作目にあたる短編集 *Unaccustomed Earth* (2008) におけるインド系アメリカ人のコスモポリタンな移動に焦点を当てたい。

特に、短編集の第二部に収録されている三部作“Once in a Lifetime”、“Year’s End”そして“Going Ashore”を中心に、彼女の作品がアメリカとアジアという地理的枠組みに留まらず、世界中を移動する登場人物たちの様々な物語を描き出している点に注目したい。

この三部作では、男性主人公カウシク (Kaushik) と女性主人公ヘーマ (Hema) の物語が様々な時間、場所、視点から展開されている。“Once in a Lifetime”では、1974年のケンブリッジでヘーマとカウシクが家族ぐるみの付き合いを通じて初めて出会い、その後1981年にマサチューセッツで再会したときのエピソードがヘーマの視点から語られている。続編“Year’s End”では、1986年のマサチューセッツが舞台となっている。大学生になったカウシクは、クリスマス休暇に再婚した父親の家に里帰りするが、家族との衝突から家を飛び出し、家族と離れて誰にも知られることなくカナダの国境線沿いで一人年越しをする。そして、最期の“Going Ashore”では、2004年のローマで再会したヘーマとカウシクがお互いのことを知っていく過程を、二人の人生を交差させたり平行線を辿らせたりしながら描いている。

それぞれのタイトルが示唆しているように、いずれの作品においても何らかの境界を越えることで、変化を経験すること、次の世代へと継承されていくことが一つのテーマとなっている。最初の短編集 *Interpreter of Maladies* (1999) においても類似したテーマが見受けられるが、本作品では、作品の舞台がアメリカとインドだけでなくヨーロッパにも設定され

¹ *Asians in America: Adaptation, Acculturation, and Transnational Ties among Asian Americans* (1998), *Orientations: Mapping Studies in the Asian Diaspora* (2001), *Asian Diasporas: New Formations, New Conceptions* (2007).

ていることや、幼少期から成人までの長い時間に渡る二人の関係性を描いていることから、時間軸と空間軸の広がりや物語の深みを感じることができるだろう。

2. コスモポリタンな移動

Unaccustomed Earth という短編集のタイトルは、エピグラフで引用されているナサニエル・ホーソーンの「税関」(“The Custom-House”)に由来している。² 短編集の登場人物たちは、様々な移動を経験し、見知らぬ土地で生活している。彼らにとって、「ホーム」といえるような場所は不在であるが、それゆえに、彼らはあらゆる場所に属しているという可能性を秘めている。

Lahiri's depictions of the elite class of Western-educated Indians and their children's relationship to both India and America dismantle the stereotype of brown-skinned immigrant families that are always outsiders to American culture and recasts them as cosmopolites, members of a shifting network of global travelers whose national loyalties are flexible. (Friedman 112)

ラヒリの作品の登場人物は、1965 年前後に移民した第一世代、そして彼らを両親に持つ第二世代である場合が多い。しかし、インド系移民の移動は、インドからアメリカへの一方向の移動だけでなく、アメリカ育ちの子供が幼少期に両親に連れられて何度かインドへ旅行したり、親元を離れた子供をアメリカへ残したまま両親がインドで老後を過ごしたり、様々な形がある。フリードマンの指摘するように、彼らの移動はコスモポリタンなものであり、インドが移動の出発地でアメリカが終着点であるとは限らない。

三部作の主人公であるヘーマとカウシクも親世代のアメリカへの移住により影響を受けている。しかし、大人になった二人が再会するのは最初に出会ったアメリカではなく、インドとアメリカの中継地点であるローマである。ローマがインドとアメリカの中継地であるように、移住先のアメリカもヘーマやカウシクにとって中継地のようなものであり、そこには常に別の場所とのつながりを切り開く可能性が残されている。彼らの移動をアメリカという国家やインドという民族性に固定することなく、なんらかのつながりを持ってローマを旅するコスモポリタンな移動として捉えることより、様々な場所への帰属について考えることが可能となるだろう。

ブルース・ロビンズ(Bruce Robbins)は、コスモポリタンという概念を普遍的なものでもなく特異でもないものへと修正することを提唱する際に、その言葉が内包している *Situatedness* という要素に重点を置いている。

² “Human nature will not flourish, any more than a potato, if it be planted and replaced, for too long a series of generations, in the same worn-out soil. My children have had other birthplaces, and, so far as their fortunes may be within my control, shall strike their roots into unaccustomed earth.”—NATHANIEL HAWTHORNE, “The Custom-House.”

As an image of criticism, detachment is deservedly obsolete. It is an article of our contemporary faith that, like Naipaul, intellectuals and academics are not detached but *situated*—for many of us, say, situated as metropolitans, or situated as professionals. To say this, however, is already to feel some impious stirrings of doubt. What precisely do we mean by the situatedness we devoutly claim to believe in? What excess baggage does it carry? How tightly does it restrict access to the other places we may come from, the other places we communicate with? How far can this metaphor of locality be reconciled with the expansive awareness or worldliness to which we also aspire? (Robbins 249)

ここで、彼が *Situatedness* と呼んでいるのは、主に第三世界の作家や知識人の位置づけのことである。第三世界の作家がどこにも属していないことを主張する一方で、彼らがメトロポリタンとしてプロフェッショナルとして位置づけられていることがしばしば議論の的となる。しかし、このような議論においては、わたしたちはあらかじめ全ての人はどこか特定の場所に属していることを前提としており、それに取って代わるような帰属性はないということになってしまうとロビンスは批判する。また、普遍化のリスクを恐れ、特異性や地域性にばかり目を向けると、複雑な帰属性が見えなくなってしまうと指摘している。彼によると、わたしたちはある特定の場所に結びついているのではなく、地球上のあらゆる場所と様々な形でつながりを持っており、そのことを認識することが重要なのである。

一方、アマンダ・アンダーソン (Amanda Anderson) は、ロビンスに見られるように近年のコスモポリタニズムがエリート主義の問題に対して自覚的であろうとする当事者性を批判し、その概念の内包する「他者への関心」は完全に自己の関心に還元できるものではないことを主張する。そこで、彼女は *Situatedness* ではなく、*Detachment* という概念に着目する。他者性の探求により自己の中に他者性を認めるという態度や姿勢を抜きにして、コスモポリタニズムの理想が備え持っている排他性や暴力を認識することはできないとアンダーソンは考える。それゆえ、コスモポリタニズムを再考することで、*Detachment* という概念の複雑性を認識することが重要だと唱えるのだ。

More significantly, I think that attending to a hybrid concept such as this will allow for a more complex conception of detachment, which is often reductively opposed to a valorized conception of situatedness or, alternatively, too easily celebrated as negative freedom. (Anderson 286)

以上のように、ロビンスもアンダーソンもコスモポリタニズムを普遍化からも特殊化からも区別することで、コスモポリタニズムという言葉のもつ新しい可能性や有用性を提示しようとしている。ロビンスがコスモポリタニズムのエリート中心主義を批判する議論に着目することで帰属性の問題に対しての自覚を問題化するのに対し、アンダーソンは他者への関心を通じて自己を自分自身からも他者からも乖離させることの必然性に焦点を当てる。

一見すると、二人は *Situatedness* と *Detachment* という全く別のベクトルを向いているように思えるが、実は双方ともこれらの概念がいかに複雑なものであるかを提示しようとしているのだ。以下では、コスモポリタニズムの内包する様々な帰属性や乖離の在り方に注目しながら、ラヒリの作品を分析していく。

3. 複雑な移動の選択

ヘーマとカウシクにとって、そして彼らの両親にとって、それぞれの移動の選択には複雑な動機や感情が絡んでいた。このような物語の登場人物たちの移動は作者ラヒリの両親の経験と重ね合わせることができるだろう。あるインタビューでラヒリは、彼女の親世代の移動の選択は、戦争や飢餓によって強いられたものではないが、残してきた家族や場所のことを考えると葛藤を伴うものであり、その代償を払いながら生きていかなければならないと述べている。³

ホーゾーンの「税関」からの引用を思い返してみると、ラヒリは見知らぬ土地で暮らし次の世代に受け継がせていくことが、生産的な未来へとつねに向いているのではなく、残してきたものを未だに引きずっているという負の側面を併せ持っていることを明らかにしているように思える。更にそこから一歩進んで、このような複雑な選択は、親世代だけでなく次の世代の帰属意識にも大きな影響を与えていることを示唆している。そこで、本章では、ヘーマとカウシクの帰属意識を特に家族や仕事との関係、そして様々な場所との関わりに焦点をあてながら見ていく。

ヘーマもカウシクもアメリカの中産階級のエリートであり、分野は違ってもいわゆる専門職についている。ラヒリの作品の登場人物は彼らのように比較的豊かで教養のある中産階級出身の場合が多い。⁴ しかしながら、ヘーマもカウシクもともに高学歴の中産階級出身であるというだけでは、二人の帰属性を規定してしまうことはできない。

例えば、第一作目の“*Once in a Lifetime*”では、カウシク一家がインドからアメリカへ戻り、ヘーマの家に居候をするが、同じ空間を共有しながらも二つの家族は全く違った生活を送っている。二家族の一つ屋根の下での共同生活について、語り手であるヘーマは、“...we were leading antipodal lives under the same roof” (Lahiri 236) と語っている。地球の反対側からやって来たカウシクは時差ぼけで昼間はずっと寝ておりヘーマとはすれ違いの生活を送っているし、二つの家族の間には飲酒や喫煙、金銭感覚など微妙な生活習慣のずれが生じてくる。

³ “Unlike so many immigrant groups,” she says of her father and his peers, “it wasn’t war, famine, persecution or anything like that driving them out. Nothing drove them out: it was a choice. But I think it was a conflicted choice. And it wasn’t a particularly romantic choice in the way that friends of mine have moved to Europe, moved to Paris. Just wanting another kind of life—it wasn’t that either. It was a combination of hunger for new experiences, perhaps wanting a better quality of life, and furthering one’s education. But it was accompanied by a certain sense of misgiving. They were leaving behind their families, essentially for personal gain. So, a hard decision to make, I think. Certainly for my father. It didn’t come without a price.” (Guardian June 21, 2008)

⁴ 例外としては、*Interpreter of Maladies* (1999) に収録されている“A Real Durwan”そして“The Treatment of Bibi Halder”などが挙げられる。

ここで述べられている対蹠的生活 (antipodal lives) という言葉をヘーマの家での生活だけでなく、地球規模に広げて考えてみることもできるだろう。ヘーマやカウシクの両親たちは、地球の反対側に家族や親戚を残したまま、別の場所で全く違った生活を送っているのである。つまり、アメリカという場所で生活を送っていても、インドという別の場所とのつながりを保持したまま暮らしているという点においてのみ、ヘーマとカウシクの両親は共通しており、その他の日常的な点においては様々な差異が生じてくるのだ。実際、ヘーマの母とカウシクの母は、彼女たちが残してきたカルカッタでの生活について話しているうちに親交を深めたのだが、インドでの二人は全く違う階級に属しており、アメリカに来なければ会うこともなかったかもしれないほど家庭環境が違っていた。そのため、死期を迎えにアメリカに戻ったカウシクの母が「一生に一度」の贅沢としてファーストクラスの飛行機に乗ってきたことの意味をヘーマの母は理解できないのだ。このような日常生活で生じる些細な誤解やずれを描き出すことにより、中産階級に属するインド系アメリカ人の中にも様々な差異があることが提示されている。

次に、ヘーマとカウシクの職業から彼らの帰属性の問題について考えてみたい。二人がローマへ滞在するのはただの観光目的ではなく、彼らの職業や個人的な動機と関わっている。

ヘーマは、古典文学で博士号を取得し、大学で教鞭をとっている。彼女がローマに来た目的は、研究のためでもあったが、実際はカルカッタでの挙式を前に一人の時間を持ちたかったからだ。ヘーマは公務のためだと両親や婚約者に嘘をついて、留守中の友人のアパートに滞在している。以下の引用にあるように、彼女にとってローマは、子供のころに両親と訪れたカルカッタのように、よく知っている場所でもあり、全く知らない場所でもあった。

Certain elements of Rome reminded her of Calcutta: the grand weathered buildings, the palm trees, the impossibility of crossing the main streets. Like Calcutta, which she'd visited throughout childhood, Rome was a city she knew on the one hand intimately and on the other hand not at all—a place that fully absorbed her and also kept her at bay. She knew the ancient language of Rome, its rulers and writers, its history from founding to collapse. But she was a tourist in everyday Italy, and apart from Giovanna, who was in Berlin on sabbatical, she did not have a single Roman friend. (Lahiri 299)

学者としてのヘーマは古代ローマの言語、人物、歴史などについての知識はあっても、毎日の生活においては旅行者にすぎない。彼女は学者としてローマと深いつながりを持っているが、一人の旅行者としては、誰も自分のことを知らない場所で、あらゆる人間関係から解放され、孤独を満喫することを望んでいるのだ。数ヵ月後、ヘーマは、両親を通じて知り合った相手とカルカッタで結婚式を挙げることになっていたが、ローマでは今後のこ

とを考えずに、研究に没頭し、自分だけの生活を過ごすことができた。このように、ヘーマのローマ滞在には、仕事という公的な理由の裏に、家族との関わりや今後の結婚から距離をおきたいという私的な理由が潜んでいる。

一方、カウシクは、五年ほど前からローマに仮住まいをしていた。報道写真家という仕事柄、一つの場所に定住することはあまりなかった。ローマは彼にとって、仕事でガザやヨルダン川西岸地区に向かう際の出発点にすぎなかった。

カウシクの報道写真家としての人生は、大学卒業後にラテンアメリカを放浪していた時に始まった。南下するにつれ、彼は次第に紛争のひどい地域へと足を踏み入れていったが、ある時、通りで遭遇した若者の死をカメラに収めたことがきっかけで、写真で生計を立てるようになった。

一つの場所に長く留まるとのなかった彼にとって、場所というのはさほど大きな意味を持たなかった。また、子供のころから家よりも外の世界を好んだカウシクにとって、写真を撮るということは彼を外の世界に連れ出してくれる行為であった。さらには、彼は仕事を理由にアメリカを避けることができ、父親と新しい家族に会わずにすんだ。

Kaushik never fully trusted the places he'd lived, never turned to them for refuge. From childhood, he realized now, he was always happiest to be outside, away from the private detritus of life. That was the first thing he'd loved about taking pictures—it had gotten him out of the house. (Lahiri 309)

カウシクの場所に対する執着が希薄なのは、彼が両親とともに幼少期に経験した二度にわたる大移動に関係していると考えられる。アメリカからインドへそしてまたアメリカへもどるという移動の経験は、彼の帰属をどこか一つの場所に規定することを許さなかった。彼は仕事で難民キャンプを訪れ、がれきの中から自分のものを探し出そうとする家族を見るたびに、彼の家族が経験した移住を思い出した。

しかし、住む場所や身の回りの物にあまりこだわらないカウシクでさえも、どこに行っても、場所や人、物に対する愛着を抱かずにはいられないことも身をもって経験していた。事実、ローマという場所は彼にとって全く関係のない場所ではなく、子供のころインドからアメリカへ戻る際に両親とともに立ち寄り観光した思い出の場所だった。彼にとってローマは全く何の所縁もない場所ではなく、何らかの愛着を持たずにはいられない場所であった。

また、ヘーマがローマ滞在後、結婚を控えていたように、カウシクもローマを起点に世界各地に旅立つ生活に別れを告げ、香港で報道雑誌の編集者として定職に就くことになっていた。彼は報道写真家としての生活に終止符を打ち、編集者としての安定を選ぼうとしていたが、この選択は何か今までとは違った人生を欲していたからだった。

以上のように、彼らのローマへの滞在は仕事という公的な理由だけでなく、家族との関わりなど私的な理由が絡んでいる。仕事と観光を明確に分かつことはできない。彼らの仕

事や家族、家やその他の場所に対する帰属意識は様々な形で形成されている。また、ヘーマにとってもカウシクにとってもローマは新たな生活に向かう前に立ち寄った中継地点であると言える。ヘーマは結婚を自分という孤独な存在の死として捉えており、カウシクの写真家から編集者への転身も死のようなものとして形容されている。彼らの移動の選択は、新しい変化を経験することで新たな人生の節目を迎えることとそれにより今までの自分という存在を死なせることという二つの選択を巡って葛藤を繰り返しており、その意味で、彼らの両親が移動することを選択した際に経験した葛藤を受け継いでいると考えられるだろう。

4. ホームでないという感覚

三部作のいずれにおいても、自分の国、自分の家、自分の部屋とは言えない場所で生活することについて描かれている。

“Once in a Lifetime”において、カウシク一家は新しい家が見つかるまでヘーマの家に同居しており、カウシクはヘーマの部屋を使用していた。ヘーマにとっては自分の家で他人と一緒に生活する初めての経験であったが、カウシクにとってヘーマの家は「ホーム」といえるような最後の場所となった。カウシクは、ヘーマの家について以下のように思い返している。“Though we didn’t belong there, it was the last place that had felt like a home” (Lahiri 291). ヘーマの家を離れた後、母と最期のときを過ごした海辺の家ではいたるところに母の病の痕跡があり、絶えず母の病や死と向き合う必要があった。しかし、ヘーマの家では、母の病気のことは何も触れずに家族で生活することができたという意味で「ホーム」と呼べるような場所であった。

母の死は、カウシクの人生に重くのしかかり、後になってもなお、彼を家族や家から遠ざけることになる。“Year’s End”では、クリスマスの休暇を利用して、カウシクは父の再婚後初めて実家に戻るのだが、かつての彼の部屋はすでに、父の再婚相手の娘たちである Piu と Rupa の部屋になっている。彼女たちはかつての彼のように、自分の意志ではなく家族に連れられてインドからアメリカへやって来ており、カウシクが母の死を経験したのと同じように彼女たちも父の死を悼んでいる。カウシクはかつての自分自身の姿を彼女たちと重ねあわせるが、母の死を忘れたくないという思いから父の再婚生活や新しい家族にはなじめずにいる。結局、彼は母の写真を持って家を離れ、一人車でカナダの国境近くの海岸まで北上し、母の死と向き合うのである。

No one in the world knew where I was, no one had the ability to reach me. It was like being dead, my escape allowing me to taste that tremendous power my mother possessed forever. (Lahiri 290)

カウシクにとって、だれも自分の存在を知らない場所へ行くことは死のようなものであり、手の届かないところへ行ってしまった母に近づく行為なのである。

“Going Ashore”においても、ヘーマとカウシクはホームとはいえない場所で過ごすという経験を共有している。ヘーマはローマで同僚のアパートに滞在しており、カウシクはアパートを借りて生活している。カウシクのアパートにあるものは全て借りものであり、いつでも出ていくことができるよう、パスポートとカメラが用意されているのだ。

ローマ滞在もあと残りわずかになったころ、二人はヘーマが研究の対象としているエトルリア人の古代都市、ヴォルテッラを旅する。“Year’s End”では、カウシクがアメリカ大陸を北上してカナダの国境付近の海岸に到着したが、“Going Ashore”において二人はイタリアの海岸沿いを北上し、切り立った崖の上にある陸の孤島のような町へと辿り着く。

前述したように、海辺へ向かうことは、誰も自分たちのことを知らない場所へ行くことで、自分の存在を消すこと、つまりある種の死や孤独を経験することを意味している。ヴォルテッラはローマとは違って、周囲から隔たった孤独な場所として描写されている。

The medieval buildings were more recent than the Forum, yet Volterra felt more remote, impervious to tourists and time. Rome had hidden them, enabled them, their affair one of thousands, but here she felt singled out, exposed. She also sensed an indifference; they were among a handful of people who seemed not to belong to Volterra, and she felt that the people who lived there were waiting for them, politely but firmly, to pass on. (Lahiri 318)

ヴォルテッラはよそ者をよせつけない不気味さがあり、旅行者がやってきてもそのまま通り過ぎていくことを期待しているようだ。ヘーマは感じ取る。しかし、彼女は一方でこの土地に深く根を張っている人々の存在を羨ましく感じる。一つの場所で生まれてそこで死んでいくという帰属性の在り方は、カウシクにもヘーマにとっても無縁のものだった。ヴォルテッラでの二人の存在は、どこにいてもよそ者として外側から観察するだけで、特定の場所に根を張ることのできない彼らの生き方そのものを映し出しているように思える。

Instead of simply revolving the problem of belonging by asserting a claim to national membership, her stories also attend to the cosmopolitan ethical possibilities contained in an unhomey vision of “unaccustomed earth.” Reversing the truism that cosmopolitanism embraces being at home in the world, Lahiri elaborates a minority cosmopolitanism that emanates from not being at home in the world. (Koshy 608)

上記の引用で指摘されているように、コーシーは、世界中のどこにいてもホームではないと感じることから生じるマイノリティの視点からのコスモポリタニズムをラヒリの作品に見出している。ヘーマとカウシクのコスモポリタンな移動も彼らがどこに行っても場所との距離感を感じることから生じていると言えるだろう。

ヴォルテッラでの旅を終えると、二人はローマを離れ別々の道を進むことになる。挙式

を控えたヘーマはカルカッタへと向かい、カウシクは香港での仕事を前に、タイのリゾート地のカオラックの辺りに滞在する。このように、最期に舞台はヨーロッパからアジアへと移っているのであるが、ヘーマとカウシクのアジアへの回帰は全く異なった位置を占めている。

今までのカウシクにとって、海は冷たくて暴力的なものであったが、タイにやって来た彼は、勇気を出して海に足を踏み入れ、沖を目指して泳ぎはじめる。カウシクの母親は海辺の家を好み、泳ぐことが大好きだった。そこで、カウシクは海への恐怖を捨て、母に近づこうとする。カウシクの物語は以下のような文章で締めくくられる。“The sea was as warm and welcoming as a bath. His feet touched the bottom, and so he let go” (331). カウシクがまるで母親のお腹の中にいる胎児のように海に温かく包み込まれ、安堵を感じた途端に、彼は津波に巻き込まれることとなる。今までは母の死がカウシクの人生に大きな影を落としていたが、一人沖をめざして泳ぐカウシクは母親の死後ずっと感じてきた孤独から解放され、母との親和性を得るのである。

一方、ヘーマは、カウシクのいる場所から海を隔てたカルカッタで挙式の準備をしていた。カウシクが一人で海へ向かったのとは対照的に、ヘーマは家族や親戚に見守られて、大地を踏みしめ、結婚という儀式的重みを感じながら新しい家族を持とうとしている。ヘーマは結婚という自分の未来から逃げるためにローマに滞在していたのだが、カルカッタではカウシクとの別れを後悔しながらも、新しい人生へと一歩踏み出している。

5. 終わりに

ヘーマとカウシクの物語は、アメリカからローマを経てアジアへと向かう。ヘーマは家族のいるカルカッタへ向かうが、一方でカウシクは誰も知り合いのいないタイに滞在している。地理的には近くにいても、二人の人生はその後交わることはない。彼らはそのような移動の選択の代償を背負いながら、ローマで別れてしまったことへの後悔を感じながら、互いに別の人生を歩まなければならないのである。

ヘーマやカウシクの親世代そして彼ら自身が経験したコスモポリタンな移動は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアのいずれの大陸にも彼らを固定させることなく、様々な場所と彼らを結びつけることとなる。しかし、多様な帰属性を経験する代償として、移住や離散や死によって感じる孤独や負い目、ある種の後ろめたさをひきずりながら、新たな生活を求めて変化を経験していかなければならないのだ。

参考文献

Anderson, Amanda. “Cosmopolitanism, Universalism, and the Divided Legacies of Modernity.”

Pheng Cheah and Bruce Robbins, eds. *Cosmopolitics: Thinking and Feeling beyond the Nation*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1998:265-289.

Friedman, Natalie. “From Hybrids to Tourists: Children of immigrants in Jhumpa Lahiri’s *The*

- Namesake.*” *Critique*, 2008 (Fall 50-1): 111-126.
- Kandice Chuh and Karen Shimakawa, eds. *Orientations: Mapping Studies in the Asian Diaspora*. Durham: Duke University Press, 2001.
- Koshy, Susan. “Minority Cosmopolitanism” *PMLA*, 2011 (May 126-3): 592-609.
- Lahiri, Jhumpa. *Unaccustomed Earth*. London: Bloomsbury, 2008.
- Ng, Franklin, ed. *Asians in America: Adaptation, Acculturation, and Transnational Ties among Asian Americans*. New York: Garland Pub, 1998.
- Rhacel S. Parreñas and Lok C.D. Sium, eds. *Asian Diasporas: New Formations, New Conceptions*. Stanford: Stanford University Press, 2007.
- Robbins, Bruce. “Comparative Cosmopolitanisms.” Pheng Cheah and Bruce Robbins, eds. *Cosmopolitics: Thinking and Feeling beyond the Nation*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1998: 246-264.
- Song, Min Hyoung. “The Children of 1965: Allegory, Postmodernism, and Jhumpa Lahiri’s *The Namesake*.” *Twentieth Century Literature*, 2007 (Fall 53-3): 345-370.